

神明町の社屋

豊橋駅前大通り沿いに、フィルム印刷や梱包事業を営む老舗企業の新社屋を計画した。駅周辺は古くから残り続ける風景と駅前開発による新しい風景が混在し時代に伴う街の変化が感じられるエリアである。計画地は創業80年以上の歴史を持つ施主の創業の地であり、生家である木造2階建ての母屋と2階建ての事務所があった。創業の地に建つ意義や既存建物への思い入れから全てを解体し更新するのではなく土地や建物に内在する歴史や記憶を引き継ぎながら未来へ繋いでいく計画を目指した。母屋の社長室棟は建設当時ならではの木架構や素材を活かした改修、離れの執務室棟は街に開いた平屋建ての構成とし、2つの建築を繋ぐ庭には既存母屋で使われていた瓦や、施主が手入れしてきた黒松など思いが宿る素材を用いることで、企業の歴史と理念を体現するオフィスを目指した。経済性や機能性を優先した一過性の計画ではなく、時間と共に積み重ねてきた歴史や思いを引き継ぎ、時代と環境の変化を享受していく漸進的な計画とすることで、企業の発展に寄与し、明るい未来に繋がっていくことを願う。



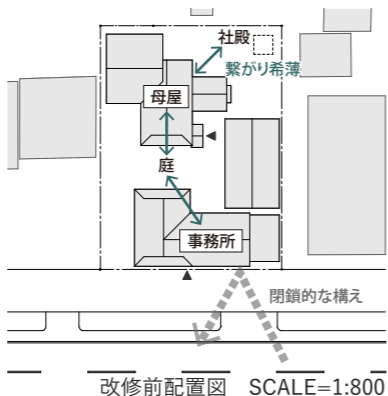
前面道路より敷地を望む。奥に建つ社長室棟は施主の生家を来客を迎える建築として改修した。手前に建つ執務室棟は馬蹄形のプランとして改築し、庭と社長室棟をおおらかに包み込む計画とした。



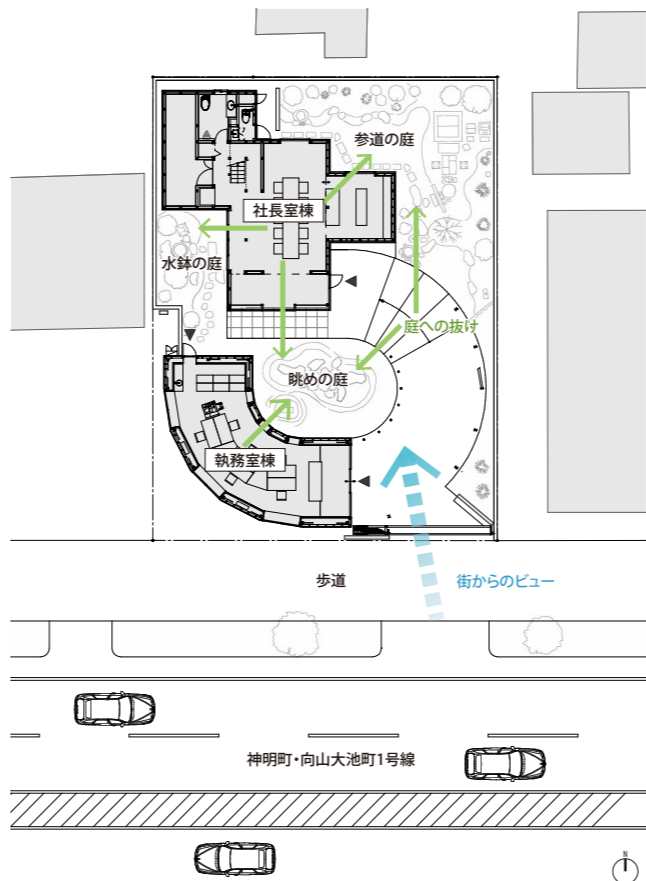
南側上空から望む。社長室棟は既存の外形を生かしながら外装を更新することで街に対して新しい顔をつくった。執務室棟の外周は高さを抑えることで、街に対する圧迫感を軽減するとともに、社長室棟が際立つよう意図した。



前面道路より既存建物を望む。



改修前配置図 SCALE=1:800



配置図 SCALE=1:400

既存建物調査 - 時間を内包するマテリアル -



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

1. 母屋の躯体
2. 母屋改修前の全景
3. 丸太梁の小屋組み
4. 母屋階段
5. 母屋2階
6. 欄間（家具として再利用）
7. 金庫（一部再利用）
8. 事務所内部
9. 障子（家具として再利用）
10. 庭の舗装
11. 瓦（庭の見切として再利用）
12. 庭から社殿を望む
13. 事務所と母屋の間の庭
14. 黒松（庭へ移植）

背景 - 創業の地に建つ意義 -

施主からは建物の老朽化対策、企業の新たな顔づくり、敷地に点在する庭や社殿など引き継がれてきた要素を繋ぎ合わせることが求められた。創業の地であること、既存建物への思い入れを踏まえ、当時の看板や金庫、精巧な欄間や指物などを生かした改修+改築を行うこととした。築80年以上の母屋は現行耐震基準への適合を図るため、耐震壁やブレースの追加、柱脚部の補強を行った。事務所は防火地域の制限より100㎡以下の準耐火建築物とし、用途上可分不可分の整理、隣棟間延焼線を発生させないための床面積設定など現行法規の集団規定を紐解くことで、時間を越えた新旧の建築物を共存させることができた。

配置計画 - 街に開かれた社屋 -

母屋は、社長室と来客を迎えるラウンジ空間を設けた「社長室棟」として改修、事務所はスタッフ6名が働くための「執務室棟」として改築することが求められた。前面道路側に建つ執務室棟はかつての閉鎖的な構えを刷新し街に対して開いた構成とすることで、庭や社長室棟が見え隠れする企業の新しい顔となる構えとした。敷地内にはこれまで大切に手入れしてきた庭や社殿など外部空間の豊かさを引き継ぎ最大限に生かすため、表情の異なる3つの庭（「眺めの庭」「参道の庭」「水鉢の庭」）を計画し庭と建築が相互に魅力を引き立て合うような配置、形状、開口部、仕上等を検討した。



眺めの庭から社長室棟を望む。奥には水鉢の庭や参道の庭が顔を出す。庭と建築を同時並行で計画することで、互いを引き立て合うような見え方を目指した。中央の黒松は施主が長い時間をかけて手入れしてきたものを移植した。



エントランスから眺めの庭を望む。移植した黒松を象徴的に見せるため、フルハイトのアルミサッシを新設した。



執務スペースから西側を望む。既存小屋組みを際立たせる内装仕上とした。

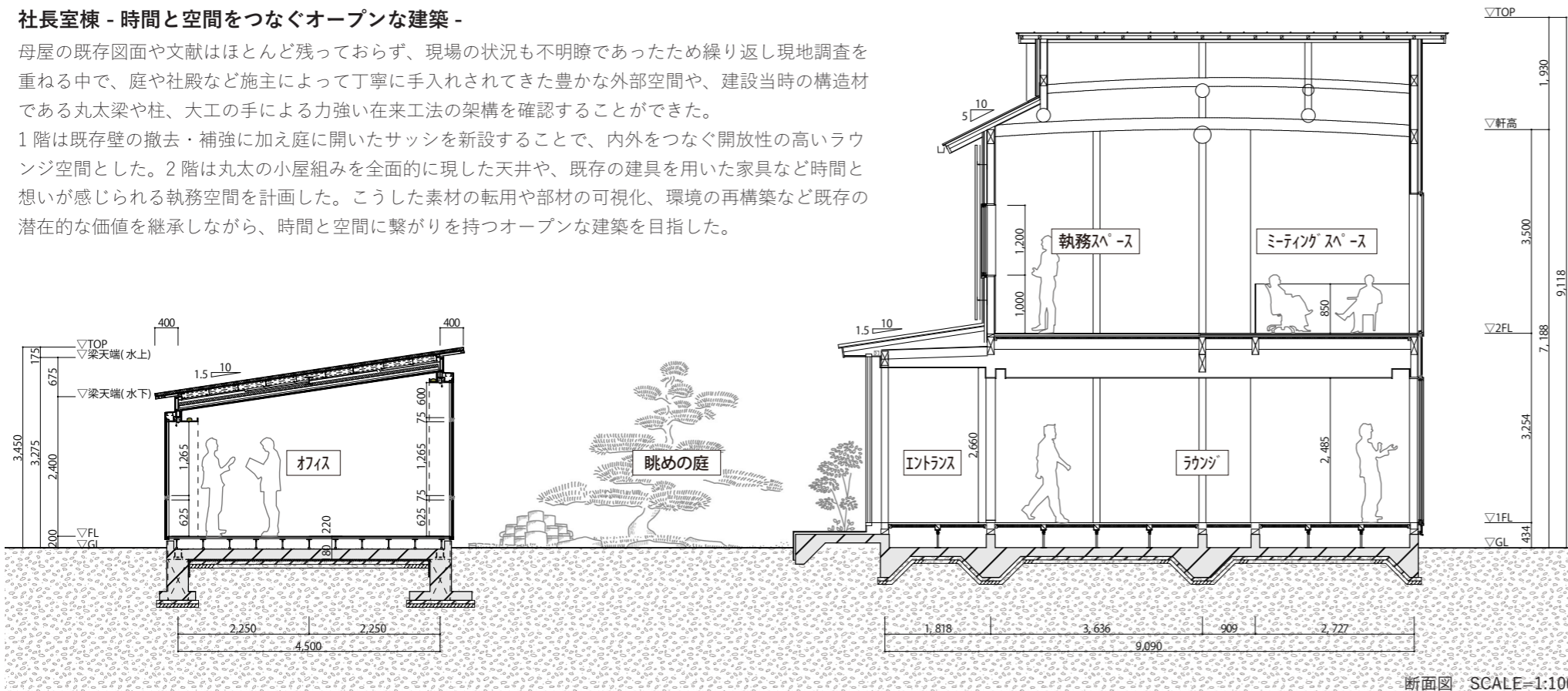


読書スペースより南側を望む。新設したサッシから執務室棟、前面道路が見える。

社長室棟 - 時間と空間をつなぐオープンな建築 -

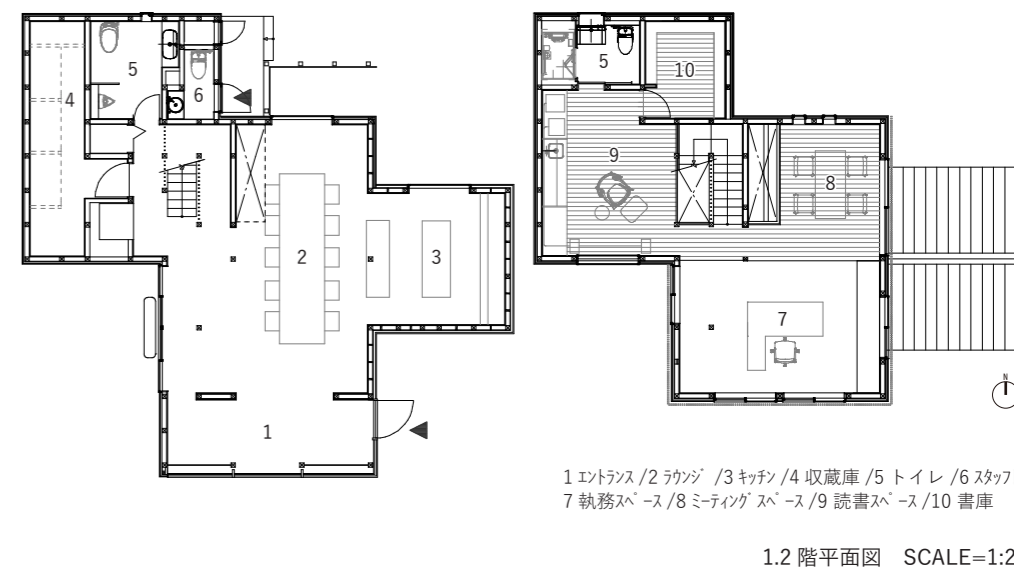
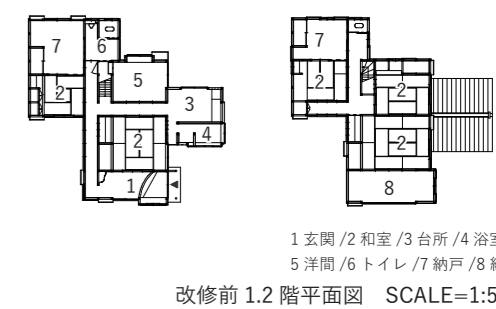
母屋の既存図面や文献はほとんど残っておらず、現場の状況も不明瞭であったため繰り返し現地調査を重ねる中で、庭や社殿など施主によって丁寧に手入れされてきた豊かな外部空間や、建設当時の構造材である丸太梁や柱、大工の手による力強い在来工法の架構を確認することができた。

1階は既存壁の撤去・補強に加え庭に開いたサッシを新設することで、内外をつなぐ開放性の高いラウンジ空間とした。2階は丸太の小屋組みを全面的に現した天井や、既存の建具を用いた家具など時間と想いが感じられる執務空間を計画した。こうした素材の転用や部材の可視化、環境の再構築など既存の潜在的な価値を継承しながら、時間と空間に繋がりを持つオープンな建築を目指した。



- 歴史を表現する構造と素材 -

現地調査中に丸太梁で作られた小屋組の状態が良好であることが判明したため、構造を象徴的に表現することを意図し野地板や垂木は壁と同色の白塗装とした。新設する素材は新旧の材料の共存と対比のバランスを取りつつ、内部と外部が連続するよう木やタイルなど自然素材を用いたインテリアを計画した。





執務室棟のエントランスから中庭を見る。中央に向かって屋根先端を高く設定し庭や社長室棟に向かって視界が開ける計画とした。内円側の鉄骨柱は75×75の角柱とし柱サイズを細くすることで、庭にスケール感を与えアプローチとの柔らかな境界をつくる。床仕上は御影石の乱張り、天井は杉羽目板を屋内外を跨ぎ連続して仕上げ、社長室棟まで緩やかに繋がっていく。



ラウンジから北を見る。新設したサッシによって庭への抜けを創出。既存の木柱は柱に刻まれた歴史を表現するため、CL塗装の現し仕上げとした。また、造作・職製家具を空間に応じて組み合わせ、全体の調和を図った。



ラウンジから西を見る。右手に見える吹抜に面し1,2階を繋ぐ存在感のある壁は、チェッポ・ディ・グレ柄の大判磁器質タイル仕上とした。



ラウンジから南を見る。奥の壁は炭を混ぜた左官仕上とし明暗の対比を生むことで、中庭を美しく切り取る。また、右手の構造壁とキッチンカウンターを同仕上げとすることで一体感を持たせた。



階段は鉄骨力桁にナラ集成材の踏板を浮かせるような納まりとし、奥に控える重厚な構造壁に対し繊細で軽やかな対比を生む計画とした。



オフィスからエントランスを見る。内周側は庭を、外周側は街を望む。水下へ向かって放射状に広がる構成によって、開口部の高さ、幅に変化が生まれる。



アプローチから眺めの庭を望む。御影石の乱張りから鉄平石で仕上げた緩やかな階段で社長室棟へ導く。



作業スペース、階段、読書スペースを望む。窓サッシの外側にはプライバシーを考慮し、縦繁のアルミ細ルーバーを設えた。



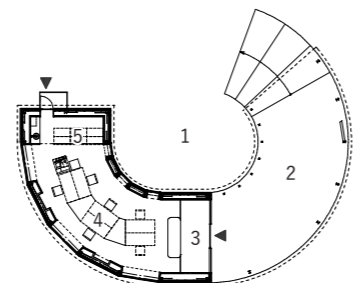
既存の母屋で利用されていた家紋入りの欄間や乳白ガラス入り建具を再利用し、ミニキッチンを組み込んだ飾り棚を製作した。



エントランスからオフィスを見る。右手の銅板製の看板は、既存事務所で利用されていたものを再研磨し引き継いだ。

執務室棟 - 街と社屋をつなぐ小さな建築 -

スタッフ6名が働く約75㎡の事務所を新築した。眺めの庭を囲う馬蹄形のプランとし半屋外の開かれたアプローチを設けることで、街から多様な庭や社長室棟が見え隠れする。小さな建築ながらも街との接点をつくり面積以上の広がりを生み出す建築を目指した。



- 1 眺めの庭
- 2 アプローチ
- 3 エントランス
- 4 オフィス
- 5 収納

執務室棟平面図 SCALE=1:400



夕景。館名サイン、銅板サイン、黒松を象徴的に演出する照明計画とした。

建築概要

- 所在地 : 愛知県豊橋市神明町 52
- 用途地域 : 商業地域
- 防火地域 : 防火地域
- 主要用途 : 事務所
- 構造階数 : 改修棟 : 木造2階建て / 新築棟 : 鉄骨造平屋建て
- 工期 : 改修棟 : 2023年1月~7月
新築棟 : 2023年9月~2024年8月
- 敷地面積 : 495.81㎡
- 建築面積 : 改修棟 : 88.33㎡ / 新築棟 : 110.20㎡
- 床面積 : 改修棟 : 154.84㎡ / 新築棟 : 74.90㎡
- 建蔽率 : 40.04%
- 容積率 : 46.33%